

# 天草版『エソポのハbras』の助詞の語彙

—— 天草版『平家物語』・『平家物語』〈高野本〉との比較を通して ——

濱千代 いづみ

キーワード：エソポのハbras 平家物語 助詞 基幹語彙 使用率

## 1 はじめに

本研究の目的は天草版『エソポのハbras』の助詞の語彙を、天草版『平家物語』・『平家物語』〈高野本〉との比較を通して計量的な観点から分析し、特色を把握することである。この研究に先立ち、平成21年3月に天草版『エソポのハbras』の助動詞の語彙を、国字本『伊曾保物語』・天草版『平家物語』との比較を通して計量的な観点から分析し、特色を把握した。平成23年2月には統計上のいろいろな指標を利用して、天草版『エソポのハbras』と天草版『平家物語』の自立語の語彙の豊富さ・語彙の類似度・語彙の偏りをはかり、作品の語彙の傾向を探った。そして、平成23年3月には天草版『エソポのハbras』の自立語の語彙について、各見出し語の使用率を計算し、段階に分けて、作品の骨格的部分をなす語集団という観点から作品の語彙の特色を探索した。これらの成果を踏まえつつ、天草版『エソポのハbras』の助詞の語彙に関して、作品の語彙全部における助詞の語彙量、共時・通時的視点での助詞の存否、作品の骨格的部分をなす助詞の語彙の特色を解明する。

天草版『エソポのハbras』は天草版『平家物語』・天草版『金句集』と合わせ綴じた形で出版され、1593年の総序を持っている。ただし、天草版『エソポのハbras』の扉の刊期は1593年であるが、天草版『平家物語』の扉・序の刊期は1592年である。天正遣欧少年使節がもたらした活版印刷機によって天草学林（コレジョ）で印刷された。今のところ日本国内で伝存の報告がなく、大英図書館にただ一本が所蔵されている。表記はポルトガル語式の写音法によるローマ字で、日本語が綴られている。『エソポのハbras』はイソップの生涯と数々の寓話とで構成され、それを室町時代末期の話し言葉に翻訳してある。イエズス会の宣教師たちが日本語の学習をするためのテキストとして、また布教の際に引用する拠り所として編集された。また、天草版『平家物語』は古典の『平家物語』を室町時代末期の話し言葉に書き直してあり、物語は喜一検校と右馬の允

の二人が対話する形式で進行する。イエズス会の宣教師たちが日本の言葉と歴史とを学習するためのテキストとして編集された。天草版『平家物語』の原拠として一方流の覚一本が用いられたことが判明している。『平家物語』〈高野本〉は語りの証本を志向した覚一本の中で古態を継承した後期の伝本で、文体は和漢混交文である。以上のような成立事情と作品相互の関連から、天草版『エソポのハブラス』の助詞の語彙の特色を考察するのに、天草版『平家物語』・『平家物語』〈高野本〉と比較を行うのは意義あることと判断する。

天草版『エソポのハブラス』及び天草版『平家物語』は「扉・序・物語の本文・目録」の四部によって構成されている。このうちの物語の本文に使用されている助詞を対象に取り上げる。計量には次の文献を利用し、単語の認定の基準を合わせた。

- a 『エソポのハブラス本文と総索引』
- b 『天草版平家物語語彙用例総索引』
- c 『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（付属語篇）

天草版『エソポのハブラス』及び天草版『平家物語』からの本文の引用は漢字仮名交じりに直して示す。cは新日本古典文学大系『平家物語』をもとに作成してあるので、その本文に基づいて引用する。

また、次の略称を用いる。

- 〈エソポ〉〈エ〉・・・天草版『エソポのハブラス』
- 〈ヘイケ〉〈ヘ〉・・・天草版『平家物語』
- 〈高野本〉〈高〉・・・『平家物語』〈高野本〉

2 助詞の語彙の全体像

2.1 助詞の異なり語数と延べ語数

〈エソポ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉の本文に用いられている助詞について、異なり語数・延べ語数を計量し、1語あたりの使用度数を計算して示すと表1のようになる。

表 1 助詞の異なり語数と延べ語数

文献	〈エソポ〉	〈ヘイケ〉	〈高野本〉
異なり語数	57	83	86
延べ語数	7726	32146	56468
1語あたりの使用度数	135.54	387.30	656.60

〈エソボ〉 〈ヘイケ〉 〈高野本〉 の物語の本文の語彙について異なり語数・延べ語数を示すと表 2 のようになる。

表 2 〈エソボ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉の語彙量

文献		〈エソボ〉	〈ヘイケ〉	〈高野本〉
異なり語数	自立語	2904	7421	14784
	付属語（助動詞）	27	41	37
	付属語（助詞）	57	83	86
	全体	2988	7545	14907
延べ語数	自立語	11751	46913	99396
	付属語（助動詞）	1957	11338	20131
	付属語（助詞）	7726	32146	56468
	全体 <sup>（注 1）</sup>	21434	90397	175995
1 語あたりの 使用度数	自立語	4.05	6.32	6.72
	付属語（助動詞）	72.48	276.54	544.08
	付属語（助詞）	135.54	387.30	656.60
	全体	7.17	11.97	11.80

ここで、作品の規模と助詞の使用との関係を考えてみよう。延べ語数全体が作品の規模を表すと設定する。〈エソボ〉の延べ語数全体を 1 とすると〈ヘイケ〉は 4.2、〈高野本〉は 8.2 になる。〈ヘイケ〉は〈エソボ〉の 4.2 倍、〈高野本〉は〈エソボ〉の 8.2 倍の規模の作品ということになる。同様の方法で延べ語数の各項目について計算する。〈エソボ〉の自立語の延べ語数 1 に対して〈ヘイケ〉は 4.0、〈高野本〉は 8.5 になる。〈エソボ〉の助動詞の延べ語数 1 に対して〈ヘイケ〉は 5.8、〈高野本〉は 10.3 になる。〈エソボ〉の助詞の延べ語数 1 に対して〈ヘイケ〉は 4.2、〈高野本〉は 7.3 になる。

表 3 作品の規模と自立語・助動詞・助詞の使用

作品	〈エソボ〉	〈ヘイケ〉	〈高野本〉
作品の規模（延べ語数全体）	1	4.2	8.2
自立語	1	4.0	8.5
助動詞	1	5.8	10.3
助詞	1	4.2	7.3

自立語の数値は作品の規模にほぼ比例する。しかし、助動詞の数値は作品の規模に比較して〈ヘイケ〉〈高野本〉ともにはるかに大きい。それゆえ〈エソボ〉は〈ヘイケ〉〈高野本〉に比べて助動詞の使用が少ない。〈エソボ〉の助動詞の語彙を計量したときには〈エソボ〉と〈ヘイケ〉のページ数によって作品の規模を判断し、作品の規模と助動詞の使用との関係を見た。その結果と、今回の延べ語数全体の結果とは一致する。助動詞の数値は〈エソボ〉と〈ヘイケ〉が作品の規模に一致するが、〈高野本〉はやや小さい。〈エソボ〉は〈ヘイケ〉と同じ程度に助詞を使用しているが、〈高野本〉に比べて助詞の使用量が増加している。この点は日本語の変遷の中で鎌倉・室町時代に助詞の使用が増えたことを数値に反映しているといえる。

以上、作品の規模と助詞の使用との関係で〈エソボ〉の助詞を〈ヘイケ〉〈高野本〉と比較した。その結果をまとめると次のようである。

- (a) 〈エソボ〉は〈ヘイケ〉と同じ程度に助詞を使用しているが、〈高野本〉に比べて助詞の使用量が増加している。これは日本語の変遷の中で鎌倉・室町時代に助詞の使用が増えたことを反映している。

また、次の点が確認できた。

- (b) 〈エソボ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉では作品の規模と自立語の使用に相関関係がある。  
(c) 〈エソボ〉は〈ヘイケ〉〈高野本〉に比べて助動詞の使用が少ない。

## 2.2 助詞の使用語彙

〈エソボ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉の物語の本文に用いられている助詞の語彙を五十音順に並べて番号を付け、主たる機能と見出しの助詞の有無を表した。次に〈エソボ〉に存するものを上位に取り出し、〈エソボ〉に存しないものを下位に置いた。それを一覧表に整えたのが表4である。なお、原則として『日本文法大辞典』の「語彙項目一覧」の助詞の部にあるものを助詞と認定し、「語彙項目一覧」で機能の別の記述がないものを複合語・形式名詞に分類した。

### 【主たる機能】

格助詞 接続助詞 副助詞 係助詞 終助詞 間投助詞 複合語 形式名詞

### 【見出しの助詞の有無】

見出しの助詞の存する場合・・・○

見出しの助詞の存しない場合・・・×

この表には学習研究社発行『完訳用例古語辞典』（[学研古語]と略す）、三省堂発行『例解古語辞典』（[三省古語]と略す）における助詞の揭示状況も併せて示す。古典語

の学校文法は平安時代語に基づいており、これらの古語辞典は古典語の学校文法を整理して載せている。

【古語辞典の見出しの助詞の有無】

巻末付録の一覧表に見出しの助詞の存する場合・・・○

巻末付録の一覧表に見出しの助詞は存しないが、本文に存する場合・・・△

巻末付録の一覧表にも、本文にも見出しの助詞の存しない場合・・・×

表4 〈エソボ〉 〈ヘイケ〉 〈高野本〉の助詞の使用語彙

番号	見出し語	主たる機能	エソボ	ヘイケ	高野本	学研古語	三省古語
4	か	係助詞	○	○	○	○	○
5	が	格助詞	○	○	○	○	○
6	かし	終助詞	○	○	○	○	○
8	かな	副助詞	○	○	○	○	○
9	かな（詠嘆）	終助詞	○	○	○	○	○
10	かは	係助詞	○	○	○	○	△
17	こそ	係助詞	○	○	○	○	○
19	さへ	副助詞	○	○	○	○	○
21	して	接続助詞	○	○	○	○	○
23	ずんば	複合語	○	○	○	△	△
24	ぞ	係助詞	○	○	○	○	○
25	そ（禁止）	終助詞	○	○	○	○	○
33	つつ	副助詞	○	○	○	△	△
34	て	接続助詞	○	○	○	○	○
35	で	格助詞	○	○	○	△	×
37	と	格助詞	○	○	○	○	○
39	といふとも	複合語	○	○	○	×	×
41	といへども	複合語	○	○	○	×	×
44	ところに	接続助詞	○	○	○	×	×
45	として	複合語	○	○	○	△	×
46	とて	格助詞	○	○	○	△	○
47	とも	接続助詞	○	○	○	○	○
48	ども	接続助詞	○	○	○	○	○
52	な（禁止）	終助詞	○	○	○	○	○
54	ながら	接続助詞	○	○	○	○	○
58	に	格助詞	○	○	○	○	○
59	において	複合語	○	○	○	△	×
63	の	格助詞	○	○	○	○	○
64	のみ	副助詞	○	○	○	○	○
65	は	係助詞	○	○	○	○	○
66	ば	接続助詞	○	○	○	○	○
67	ばかり	副助詞	○	○	○	○	○
68	ばし	副助詞	○	○	○	△	○
69	ばや	終助詞	○	○	○	○	○
70	へ	格助詞	○	○	○	○	○

番号	見出し語	主たる機能	エソボ	ヘイケ	高野本	学研古語	三省古語
72	ほど	副助詞	○	○	○	△	×
73	ほどに	接続助詞	○	○	○	△	△
74	まで	副助詞	○	○	○	○	○
76	も	係助詞	○	○	○	○	○
78	ものか	終助詞	○	○	○	△	△
79	ものかな	終助詞	○	○	○	△	△
84	ものを	終助詞	○	○	○	○	○
85	や	係助詞	○	○	○	○	○
91	よ	間投助詞	○	○	○	○	○
94	より	格助詞	○	○	○	○	○
95	よりして	複合語	○	○	○	×	×
96	を	格助詞	○	○	○	○	○
98	をば	複合語	○	○	○	△	△
99	をもって	複合語	○	○	○	×	×
2	いで (打消)	接続助詞	○	○	×	△	×
11	から	格助詞	○	○	×	○	○
43	ところで	接続助詞	○	○	×	×	×
55	など	副助詞	○	○	×	○	○
56	なりとも	複合語	○	○	×	×	×
62	によつて	複合語	○	○	×	×	×
88	やら	副助詞	○	○	×	△	△
14	けれども	接続助詞	○	×	×	×	×
1	あひだ	形式名詞	×	○	○	△	△
3	うへ	形式名詞	×	○	○	△	△
20	し	副助詞	×	○	○	○	○
22	しも	副助詞	×	○	○	○	○
26	だに	副助詞	×	○	○	○	○
27	だにあるに	複合語	×	○	○	×	×
32	つつ	接続助詞	×	○	○	○	○
36	で (打消)	接続助詞	×	○	○	○	○
38	ど	接続助詞	×	○	○	○	○
42	とかや	複合語	×	○	○	△	△
49	とものがな	複合語	×	○	○	△	△
50	とよ	複合語	×	○	○	△	△
51	な	間投助詞	×	○	○	○	○
57	なんど	副助詞	×	○	○	○	△
61	にて	格助詞	×	○	○	○	○
75	まれ	複合語	×	○	○	△	△
82	ものゆゑ	接続助詞	×	○	○	○	○
83	ものゆゑに	接続助詞	×	○	○	○	○
90	やらん	副助詞	×	○	○	△	△
93	よな	間投助詞	×	○	○	△	○
12	からして	複合語	×	○	×	×	×
30	ちやは	複合語	×	○	×	×	×
53	なう	終助詞	×	○	×	△	△
77	もがな	終助詞	×	○	×	○	○
80	ものかは	終助詞	×	○	×	△	△

番号	見出し語	主たる機能	エソボ	ヘイケ	高野本	学研古語	三省古語
86	やな	終助詞	×	○	×	△	×
100	をもて	複合語	×	○	×	△	×
7	がてら	副助詞	×	×	○	△	○
13	からに	接続助詞	×	×	○	△	○
15	ござんなれ	複合語	×	×	○	△	△
16	ござんめれ	複合語	×	×	○	△	△
18	ごとくんば	複合語	×	×	○	×	×
28	だも	副助詞	×	×	○	△	△
29	ちやう	形式名詞	×	×	○	△	△
31	つ	格助詞	×	×	○	△	△
40	といへど	複合語	×	×	○	×	×
60	にして	複合語	×	×	○	△	△
71	べくんば	複合語	×	×	○	×	×
81	ものの	接続助詞	×	×	○	○	○
87	やは	係助詞	×	×	○	○	△
89	やらう	終助詞	×	×	○	△	△
92	よう	間投助詞	×	×	○	×	×
97	をして	複合語	×	×	○	△	×
101	をや	終助詞	×	×	○	△	△

〈エソボ〉に存する助詞は「か」から「けれども」までの57語である。このうち、〈エソボ〉にのみ存し、〈ヘイケ〉〈高野本〉と〔学研古語〕〔三省古語〕の巻末付録の一覧表および本文に存しないの(×)は「けれども」1語である。その他の助詞は〈エソボ〉〈ヘイケ〉に共通に存している。その中で〈高野本〉に存せず、〔学研古語〕〔三省古語〕の巻末付録の一覧表にも存しないの(△または×)は、「いで」「ところで」「なりとも」「によつて」「やら」の5語である。これらの助詞は、室町時代末期の口語的文脈で用いられた語群といえる。

〈エソボ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉に共通に存するのは「か」から「をもつて」までの50語である。これらは「で(格助詞)」「ところに」のように〔学研古語〕〔三省古語〕の巻末付録の一覧表に存しない場合(△または×)もあるが、鎌倉時代から室町時代末期にかけて用いられた語群といえる。その中でも「て」「に」のように〔学研古語〕〔三省古語〕の巻末付録の一覧表に存するの(○)は、平安時代から用いられていた語群である。

〈エソボ〉に存しない助詞は「あひだ」から「をや」までの44語である。このうち、〈ヘイケ〉〈高野本〉と〔学研古語〕〔三省古語〕の巻末付録の一覧表には存する(○)のに、〈エソボ〉に存しない(×)助詞は、「し」「しも」「だに」「つつ」「で(打消)」「ど」「な(間投助詞)」「にて」「ものゆゑ」「ものゆゑに」の10語である。これらは室町時代末期の口語的文脈で用いられなくなった語群である。〈ヘイケ〉の作者はその序文で『平家物語』を室町時代末期の話し言葉に書き直した旨を述べているが、実際にはか

なり原抛の言葉をそのままに残している。そのため、〈ヘイケ〉の助詞には室町時代末期に口語的文脈で用いられなくなっていたものも含まれる。

以上、〈エソボ〉に存する助詞を〈ヘイケ〉〈高野本〉〔学研古語〕〔三省古語〕と比較した。その結果をまとめると次のようである。

- (a) 「けれども」のように〈エソボ〉にのみ存し、〈ヘイケ〉〈高野本〉と〔学研古語〕〔三省古語〕の巻末付録の一覧表および本文に存しない助詞、「いで」のように〈エソボ〉〈ヘイケ〉には存するが、〈高野本〉と〔学研古語〕〔三省古語〕の巻末付録の一覧表に存しない助詞は、室町時代末期の口語的文脈で用いられた語群である。
- (b) 〈エソボ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉に共通に存する助詞は、鎌倉時代から室町時代末期にかけて用いられた語群である。その中でも「て」「に」のように〔学研古語〕〔三省古語〕の巻末付録の一覧表に存するものは、平安時代から用いられていた語群である。
- (c) 「し」「で（打消）」のように、〈ヘイケ〉〈高野本〉と〔学研古語〕〔三省古語〕の巻末付録の一覧表には存するのに〈エソボ〉に存しない助詞は、室町時代末期の口語的文脈で用いられなくなった語群である。

### 3 〈エソボ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉の助詞の使用度数と基幹語彙

#### 3.1 〈エソボ〉の助詞の使用度数と基幹語彙

これから〈エソボ〉の助詞の語彙に関して、各助詞の使用度数を計量し、使用率を計算して「基幹語彙」を認定していく。〈ヘイケ〉〈高野本〉の助詞についても同じ基準で行う。この基幹語彙とは、ある言語資料を対象とした語彙調査を行った場合に得られる、骨格の部分集団を指し、使用率の高い語がその資料の基幹語になる。〈エソボ〉の助動詞の語彙を考察したときには、使用率によって語を位置づけ、使用率が50.00パーミル以上の語を第一基幹語彙、10.00パーミル以上50.00パーミル未満の語を第二基幹語彙に設定した。また、〈エソボ〉の自立語の語彙を考察したときには、作品の異なり語数の多少にかかわらず、一定の使用率以上の語数にあまり違いがなかったので、使用度数の上位50語を第一基幹語彙、51位以下で使用率が1.00パーミル以上の語を第二基幹語彙に設定した。

今回〈エソボ〉の助詞の語彙を考察するにあたり、助動詞と同様に使用率によって語を位置づけることにし、分類の基準を見直した。10.00パーミル以上の分類は助動詞で設定した基準と同じである。それより下位の分類は10.00パーミルを基本にして、5.00、2.50、1.25、0.625のように数値を順に半分にしていく。設定した基準を示すと次のよう



になる。

(K 1) ランク	$50.00 \leq \alpha$
(K 2) ランク	$10.00 \leq \alpha < 50.00$
(K 3) ランク	$5.00 \leq \alpha < 10.00$
(A) ランク	$2.50 \leq \alpha < 5.00$
(B) ランク	$1.25 \leq \alpha < 2.50$
(C) ランク	$0.625 \leq \alpha < 1.25$
(D) ランク	$0.00 < \alpha < 0.625$
「不使用」	$\alpha = 0.00$

$\alpha$  の単位はパーミル (‰)

助動詞の場合は上記の (K 1) ランクの範囲を第一基幹語彙、(K 2) ランクの範囲を第二基幹語彙にした。この範囲で助動詞全体の970パーミル近くを占めたからである。しかし、助詞の場合、この範囲では900パーミルに至らない。そこで、今回の助詞では (K 3) ランクまでを基幹語彙に含め、(K 3) ランクの範囲を第三基幹語彙にする。

〈エソポ〉の助詞を使用度数の多いものから順に整理し、使用度数と使用率、累積使用度数と累積使用率、ランクを示すと表5のようになる。比較のために〈ヘイケ〉〈高野本〉の助詞の使用度数と使用率とを付した。

表5において (K 1) ランクは、順位1の「を」から順位7の「も」までの7語である。これらの使用度数はきわめて多く、使用率も高い。累積使用度数は5907で、助詞全体の765パーミルに相当する。また (K 2) ランクは、順位8の「が」から順位12の「ども」までの5語である。(K 2) ランクまでの累積使用度数は6923で、助詞全体の896パーミルに相当する。そして、(K 3) ランクは順位13の「へ」から順位19の「ところで」までの7語である。(K 3) ランクまでの累積使用度数は7343で、助詞全体の950パーミルに相当する。これを〈エソポ〉の助詞の基幹語彙と認める。

以上、〈エソポ〉の助詞の語彙を考察するのに基幹語彙という観点をうい、基準を設定し、基幹語彙を抽出した。その結果をまとめると次のようである。

- (a) 〈エソポ〉の助詞の基幹語彙として使用率5.00パーミル以上の「を」「て」「の」など19語を認める。これらは助詞全体の950パーミルに相当し、〈エソポ〉という作品の骨格的部分にあたる語群である。

### 3.2 〈ヘイケ〉の助詞の使用度数と基幹語彙

〈ヘイケ〉の助詞を使用度数の多いものから順に整列し、使用度数と使用率、累積使用度数と累積使用率、ランクを示すと表6ようになる。

表6において(K1)ランクは、順位1の「て」から順位8の「ば」までの8語である。その累積使用度数は25443で、助詞全体の791パーミルに相当する。また(K2)ランクは、順位9の「が」から順位15の「で」までの7語である。(K2)ランクまでの累積使用度数は29496で、助詞全体の918パーミルに相当する。そして、(K3)ランクは順位16の「をば」から順位20の「ばかり」までの5語である。(K3)ランクまでの累積使用度数は30516で、助詞全体の949パーミルに相当する。これを〈ヘイケ〉の助詞の基幹語彙と認める。

### 3.3 〈高野本〉の助詞の使用度数と基幹語彙

〈高野本〉の助詞を使用度数の多いものから順に整列し、使用度数と使用率、累積使用度数と累積使用率、ランクを示すと表7ようになる。

表7において(K1)ランクは、順位1の「の」から順位7の「も」までの7語である。その累積使用度数は41556で、助詞全体の736パーミルに相当する。また(K2)ランクは、順位8の「ば」から順位16の「や」までの9語である。(K2)ランクまでの累積使用度数は52067で、助詞全体の922パーミルに相当する。そして、(K3)ランクは順位17の「をば」から順位20の「まで」までの4語である。(K3)ランクまでの累積使用度数は53561で、助詞全体の949パーミルに相当する。これを〈高野本〉の助詞の基幹語彙と認める。

#### 4 〈エソボ〉で基幹語彙の助詞

前章では〈エソボ〉の助詞の基幹語彙として19語を認定した。ここではそれらの語の特色を考察する。

〈エソボ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉で共通に基幹語彙に入る助詞は、〈エソボ〉で（K1）ランクの「を」「て」「の」「に」「は」「と」「も」、（K2）ランクの「が」「ば」「ぞ」「ども」、（K3）ランクの「へ」「をば」「か」の14語である。その中でも〈エソボ〉で（K1）ランクの7語は〈ヘイケ〉〈高野本〉でも同じランクに入り、きわめて使用率の高い語群である。これらの語は鎌倉・室町時代を通して書き言葉としても話し言葉としても頻繁に用いられた。14語のうち「をば」は現代の共通語であまり見られない。現代語で対象を強調する場合には一般に「は」を用いる。しかし、他の13語は現代語でもよく用いる語群である。

〈エソボ〉〈ヘイケ〉で基幹語彙に入るが、〈高野本〉で基幹語彙に入らず2ランク以上離れているのは、「によつて」「から」の2語である。

##### 「によつて」複合語

各作品の使用度数，使用率，ランク

〈エ〉103 13.33%（K2） 〈ヘ〉198 6.16%（K3） 〈高〉0 不使用

まず、〈高野本〉の使用度数0について触れておく。『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（付属語篇）には「によつて」が見出し項目として存在しない。先に作成された（自立語篇）で助詞「に」・動詞「よる」・助詞「て」に分割され、「によつて」を単位として捉えなかったからである。そこで、（自立語篇）の見出し項目「よる」を利用して「によつて」を計量した。すると、〈高野本〉の「によつて」の使用度数が123になり、（B）ランクに入った。この結果は〈エソボ〉〈ヘイケ〉と2ランク以上離れている。室町時代末期に接続助詞的用法の「によつて」が増加していることが判明した。

##### 「から」格助詞

各作品の使用度数，使用率，ランク

〈エ〉66 8.54%（K3） 〈ヘ〉242 7.53%（K3） 〈高〉0 不使用

「から」に関して、近藤（2002）で〈ヘイケ〉の「から」が多くは〈高野本〉の「より」と対応しており、『平家物語』に起点・経由点などを示す「より」が多く、その大

部分が〈ヘイケ〉で「から」と訳されたという指摘がなされている。〈エソボ〉の「から」も起点・経由点を示すものが多い。しかし、〈ヘイケ〉の「から」はすべて格助詞と認められるが、〈エソボ〉の「から」には接続助詞と認められるものがある。

例1 下心。あまたの人は、わが身に应ぜぬ楽しみを巧むから、一旦その楽しみをも遂ぐれども、その道から落ちて、身をあやまつものぢや。（〈エ〉488-9）

〈エソボ〉で基幹語彙に入るが、〈ヘイケ〉〈高野本〉で基幹語彙に入らず2ランク以上離れているのは、「ところで」である。

### 「ところで」接続助詞

各作品の使用度数，使用率，ランク

〈エ〉44 5.70%（K 3） 〈ヘ〉61 1.90%（B） 〈高〉0 不使用

「ところで」も『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（付属語篇）には見出し項目が存在しない。そこで、「によつて」と同様に計量したところ、〈高野本〉の「ところで」の使用度数が1になり、(D) ランクに入った。「ところで」の場合、〈エソボ〉と〈ヘイケ〉の間だけでなく、〈ヘイケ〉と〈高野本〉の間にも隔たりがある。「ところで」は「によつて」に比べて後発で、室町時代末期には話し言葉でよく用いられていた。〈ヘイケ〉は口語訳に際して原拠の『平家物語』の文脈の影響を受けているが、〈エソボ〉は〈ヘイケ〉よりも室町時代末期の話し言葉を取り入れやすかったと考える。

以上をまとめると次のようになる。

- (a) 〈エソボ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉で基幹語彙に入る「を」「て」「も」などは鎌倉・室町時代を通して書き言葉としても話し言葉としても頻繁に用いられたものである。
- (b) 接続助詞的用法の「によつて」が室町時代末期に増加し、〈エソボ〉〈ヘイケ〉で基幹語彙に入った。
- (c) 起点・経由点を示すのに「から」が「より」と交替して増加し、〈エソボ〉〈ヘイケ〉で基幹語彙に入ったが、さらに〈エソボ〉には接続助詞の用法も見られる。
- (d) 「ところで」は「によつて」に比べて後発で、室町時代末期には話し言葉でよく用いられ、〈エソボ〉で基幹語彙に入った。

## 5 〈エソボ〉で基幹語彙でない助詞

### 5.1 使用率に2ランク以上の隔たりのある助詞

〈エソボ〉で基幹語彙に入らない助詞について、〈エソボ〉のランクと〈ヘイケ〉〈高野本〉のランクとの間に2ランク以上の隔たりがあるかどうかを目安にして整理し、隔たりのあるものを取り出した。なお、「など」と「なんど」は双方の使用度数を合計すると、〈エソボ〉10、〈ヘイケ〉143、〈高野本〉196になり、順に（B）（A）（A）ランクに入るので取り出さない。

- [1] 〈エソボ〉で（A）ランク～（C）ランク、〈ヘイケ〉〈高野本〉で上位  
「こそ」「まで」「や」
- [2] 〈エソボ〉で（A）ランク～（C）ランク、〈ヘイケ〉〈高野本〉で下位  
「な（禁止）」
- [3] 〈エソボ〉〈ヘイケ〉で（A）ランク～（C）ランク、〈高野本〉で上位  
「とて」「して」
- [4] 〈エソボ〉〈高野本〉で（A）ランク～（C）ランク、〈ヘイケ〉で上位  
「で（格助詞）」
- [5] 〈エソボ〉〈ヘイケ〉で（D）ランクか「不使用」、〈高野本〉で上位  
「ばや」「あひだ」「だに」「つつ」「で（打消）」  
「にして」「にて」「やらん」

〈エソボ〉が下位で〈ヘイケ〉〈高野本〉が上位にある[1]には、『平家物語』を話し言葉に翻訳するときに引き継いだ語群があがっている。このうちの「こそ」「まで」には、三作品で用法上の大きな相違が見られない。「こそ」は係り結びの崩壊した室町時代末期には話し言葉での使用が減少したが、<sup>（注3）</sup>〈ヘイケ〉は原拠の『平家物語』の語法をかなり引き継いでいる。また、「まで」は範囲や到達点を具体的に記述することの多い『平家物語』で欠かせない助詞であり、〈ヘイケ〉で使用を減らすことがなかった。しかし、「や」には三作品で用法上の相違が見られるので後に述べる。

〈エソボ〉〈ヘイケ〉が下位で〈高野本〉が上位にある[3][5]には時代の変遷を反映する語群があがっている。鎌倉時代に比べて室町時代末期の話し言葉で減少したり、ほとんど用いられなくなったりしたものである。

ところで、〈エソボ〉が上位で〈ヘイケ〉〈高野本〉が下位にある[2]、また、〈エソボ〉〈高野本〉が上位で〈ヘイケ〉が下位にある[4]はどのように考えたらよいのだろうか。[1]の「や」、[4]の「で（格助詞）」についてはこの節で、[2]の「な（禁止）」については次の節で考察する。

## 「や」係助詞

助詞「や」を機能によって分類し、使用度数・使用率を示すと次のようである。

表 8 助詞「や」の機能による分類

	係助詞	終助詞	間投助詞	並立助詞	計
作品	使用度数	使用度数	使用度数	使用度数	使用度数
ランク	使用率 %	使用率 %	使用率 %	使用率 %	使用率 %
〈エソボ〉	1	1	3	2	7
(C)	0.13	0.13	0.39	0.26	0.91
〈ヘイケ〉	4 1	3	4 8	2 8	1 2 0
(A)	1.27	0.09	1.49	0.87	3.73
〈高野本〉	3 4 3	4 2	1 6 5	1 7	5 6 7
(K 2)	6.07	0.74	2.92	0.30	10.04

助詞「や」の〈エソボ〉の使用率は同じ時期に成立した〈ヘイケ〉と比べてきわめて少ない。係助詞の用法は1例のみである。

例2 ここを通るは、いつぞや対面した乗り馬ではないか？（〈エ〉460-8）

この例は「馬と驢馬の事」の段で、驢馬から馬への会話文に見られる。「いつ」「ぞ」との結び付きが強く、「いつぞや」を一語の副詞として見出し項目を立てている国語辞典もあるが、三作品とも「や」を助詞として処置した。助詞「や」が〈高野本〉で（K 2）ランクの基幹語彙になっているのに〈ヘイケ〉で使用率が（A）ランクと低くなっていることに関して、近藤（2002）では〈ヘイケ〉の終助詞「か」が〈高野本〉の係助詞「や」と対応する例が目立つことと関連していると指摘した。三作品の助詞「や」の使用状況を見ると、次のことが指摘できる。室町時代末期の話し言葉では「や」は係助詞の用法が衰退し、間投助詞の用法よりも少なくなった。それでも〈ヘイケ〉は原拠の『平家物語』をかなり引き継ぎ、係助詞の用法を残している。

## 「で」格助詞

各作品の使用度数，使用率，ランク

### 「で」格助詞

〈エ〉32 4.14%（A） 〈ヘ〉363 11.29%（K 2） 〈高〉198 3.51%（A）

「にて」格助詞

〈エ〉 0 不使用

〈ヘ〉 6 0.19% (D)

〈高〉 356 6.30% (K 3)

格助詞「で」に関して、近藤(2002)で〈ヘイケ〉の「で」が〈高野本〉の「で」「にて」に対応することが多く、そのことが〈ヘイケ〉〈高野本〉の「で」の使用率に大差をつけたと指摘している。『平家物語』は場所・時、手段・方法などを記述することが多い。その場合に〈高野本〉では「で」を用いることもあったが、主として「にて」を用い、〈ヘイケ〉では「で」を用いたと考えられる。〈エソボ〉は『平家物語』ほどに場所・時、手段・方法などを記述しない。「で」が[4]にあがったのは、「にて」との関係では「にて」の音韻変化形の「で」の使用が室町時代末期に増加したことと、作品が場所・時、手段・方法などをよく記述するものであるかどうかということとに起因する。

〈エソボ〉で基幹語彙に入らない助詞について、〈エソボ〉のランクと〈ヘイケ〉〈高野本〉のランクとの間に2ランク以上の隔たりがあるものを取り出して特徴を述べてきたが、個別に取り上げた助詞についてまとめると次のようになる。

(a) 助詞「や」の〈エソボ〉の使用率は同じ時期に成立した〈ヘイケ〉と比べてきわめて少ない。室町時代末期の話し言葉では「や」は係助詞の用法が衰退し、間投助詞の用法よりも少なくなった。それでも〈ヘイケ〉は原拠の『平家物語』をかなり引き継ぎ、係助詞の用法を残している。

(b) 格助詞「で」の〈エソボ〉の使用率は同じ時期に成立した〈ヘイケ〉と比べてはるかに少ないが、〈高野本〉と近い数値になった。これは「にて」との関係では「にて」の音韻変化形の「で」の使用が室町時代末期に増加したことと、作品が場所・時、手段・方法などをよく記述するものであるかどうかということとに起因する。

## 5.2 〈エソボ〉で(A)ランク～(C)ランク、〈ヘイケ〉〈高野本〉で下位の助詞「な(禁止)」終助詞

各作品の使用度数, 使用率, ランク

〈エ〉 27 3.50% (A)

〈ヘ〉 34 1.06% (C)

〈高〉 43 0.76% (C)

〈エソボ〉には禁止の意味を表す文末表現として、終助詞「な」のほかに終助詞「そ」、副詞「な」と終助詞「そ」が呼応する「な…そ」、形容詞の命令形「なかれ」が見られる。終助詞「な」は「な…そ」とともに訓点資料には見られず、「な…そ」よりも直接的で

びしい表現といわれる。平安時代には男性が目下の者に対して用い、女性は「な…そ」を用いた。以下、これらの禁止表現も範囲に入れて終助詞「な」について考察していく。  
〈エソボ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉におけるこれらの表現の使用度数は次のようである。

表9 〈エソボ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉の禁止の文末表現

表現	な	そ	な…そ	なかれ	計
〈エソボ〉	27 (3.49% A)	1	1	1	30
〈ヘイケ〉	34 (1.06% C)	0	16	0	50
〈高野本〉	43 (0.76% C)	0	24	7	74

上記の表の使用度数1を助詞の場合の使用率と同等に仮定すると、〈エソボ〉の使用度数の計30の使用率は約3.9、〈ヘイケ〉の50は約1.6、〈高野本〉の74は約1.3パーミルになる。終助詞「な」とは異なる文末表現「そ」「な…そ」「なかれ」を合わせても〈ヘイケ〉〈高野本〉と比較して〈エソボ〉の禁止表現は多いといえる。

〈エソボ〉の終助詞「な」は「エソボ養子に教訓の条々」の段に8例、「下心」に8例、会話の中に11例ある。「エソボ養子に教訓の条々」の段では、エソボが終助詞「な」と命令形を駆使して、養子に教訓を述べていく。「下心」ではその寓話の内容から導き出される教訓が簡潔にまとめてある。「エソボ養子に教訓の条々」の段、および「下心」の終助詞「な」は行為を禁じる形で教訓を表すために用いられている。以下に少し長くなるが、「エソボ養子に教訓の条々」の段から引用する。〈エソボ〉に1例のみの「なかれ」もこの教訓の中に現れる。

例3 慳貪放逸な者を友にすな。悪人の威勢富貴を羨むな。道理の上からでない時は、富貴はかへつて成りさがる基ぞ。わが言はうずる言葉を押しとどめて、他人の言ふことを聞け。言語によこしまなかれといふ轡を常に含め。(〈エ〉438-7・8・11)

次に「下心」の中の例をあげる。

例4 平生不和な者の、難儀を救はうといふことはあるまじい。いささかもその言葉を信ずるな。(〈エ〉456-20)

会話の中に現れる終助詞「な」11例のうち6例は尊敬語とともに用いられている。

例5 所詮この黄金をばシャントも取らせられな。(〈エ〉420-4)

例6 また妻とも思はせらるるな。(〈エ〉422-10)

前者はエソボから主人のシャントへの会話に現れたものである。活用語の未然形(また



は連用形)に「な」が付いており、このような接続のものが〈エソボ〉に2例見られる。<sup>〈注5〉</sup>  
後者は女性の会話に現れたもので、妻が夫のシャントに対して憤慨している場面での使用である。

会話の中に現れる終助詞「な」のうち尊敬語を伴わないものに、行為を禁じる形で教訓を表すものがある。

例7 かの獣の、我に教訓をないた。それを何ぞといふに、『汝向後御身のやうに、大事に臨うで見放さうずる者と、知音すな』と。 (〈エ〉471-7)

二人連れの一人からもう一人への会話に現れたものである。

〈エソボ〉に1例のみ見られる終助詞「そ」は、エソボからシャントへの会話の中で尊敬語とともに用いられている。

例8 少しもご氣遣ひあられそ。 (〈エ〉424-10)

〈エソボ〉に1例のみ見られる「な…そ」は「下心」に現れる。

例9 人は威勢の盛んなとて、他をばな卑しめそ。 (〈エ〉460-14)

このように〈エソボ〉の禁止表現は行為を禁じる形で教訓を表す場合が多い。終助詞「な」は教訓性の高い〈エソボ〉という作品の内容を反映する助詞である。

以上をまとめると次のようになる。

- (a) 〈エソボ〉の禁止表現は〈ヘイケ〉〈高野本〉と比較して高率である。〈エソボ〉の終助詞「な」の多くは行為を禁じる形で教訓を表すために用いられる。終助詞「な」は教訓性の高い〈エソボ〉という作品の内容を反映する助詞である。

## 6 おわりに

天草版『エソボのハプラス』の助詞の語彙に関して、作品の語彙全部における助詞の語彙量、共時・通時的視点での助詞の存否、基幹語彙となる助詞の特色を考察してきた。それを振り返って以下にまとめて記述する。

- (a) 作品の規模と助詞の使用との関係で〈エソボ〉の助詞を〈ヘイケ〉〈高野本〉と比較した。使用率の面で〈エソボ〉は〈ヘイケ〉と同じ程度に助詞を使用しているが、〈高野本〉に比べて助詞の使用量が増加している。これは日本語の変遷の中で鎌倉・室町時代に助詞の使用が増えたことを反映している。また、〈エソボ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉では作品の規模と自立語の使用に相関関係があり、〈エソボ〉は〈ヘイケ〉〈高野本〉に比べて助動詞の使用が少ないことが確認できた。

- (b) 〈エソボ〉に存する助詞を〈ヘイケ〉〈高野本〉[学研古語][三省古語]と比較した。「けれども」のように〈エソボ〉にのみ存し、〈ヘイケ〉〈高野本〉と[学研

古語] [三省古語] の巻末付録の一覧表および本文に存しない助詞、「いで」のように〈エソボ〉〈ヘイケ〉には存するが、〈高野本〉と[学研古語] [三省古語] の巻末付録の一覧表に存しない助詞は、室町時代末期の口語的文脈で用いられた語群である。〈エソボ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉に共通に存する助詞は、鎌倉時代から室町時代末期にかけて用いられた語群である。その中でも「て」「に」のように[学研古語] [三省古語] の巻末付録の一覧表に存するものは、平安時代から用いられていた語群である。「し」「で(打消)」のように、〈ヘイケ〉〈高野本〉と[学研古語] [三省古語] の巻末付録の一覧表には存するのに〈エソボ〉に存しない助詞は、室町時代末期の口語的文脈で用いられなくなった語群である。

- (c) 助詞の使用率の高低によって基準を設定し、基幹語彙を抽出した。〈エソボ〉の助詞の基幹語彙として使用率5.00パーミル以上の「を」「て」「の」など19語を認定した。これらは助詞全体の950パーミルに相当し、〈エソボ〉という作品の骨格的部分にあたる語群である。〈エソボ〉〈ヘイケ〉〈高野本〉で基幹語彙に入る「を」「て」「も」などは、鎌倉・室町時代を通して書き言葉としても話し言葉としても頻繁に用いられたものである。〈エソボ〉〈ヘイケ〉で基幹語彙に入る接続助詞的用法の「によつて」は、室町時代末期に増加したものである。〈エソボ〉〈ヘイケ〉で基幹語彙に入る「から」は「より」と交替して増加し、起点・経由点を示すが、〈エソボ〉には接続助詞の用法も見られる。〈エソボ〉でのみ基幹語彙に入る「ところで」は「によつて」に比べて後発で、室町時代末期には話し言葉でよく用いられたものである。

- (d) 〈エソボ〉で基幹語彙に入らない助詞の中から、〈エソボ〉のランクと〈ヘイケ〉〈高野本〉のランクとの間に2ランク以上の隔たりがあるものを取り出した。その中でも「や」「で(格助詞)」「な(禁止)」には際立つ特徴が見られる。

「や」の〈エソボ〉の使用率は同じ時期に成立した〈ヘイケ〉と比べてきわめて少ない。室町時代末期の話し言葉では「や」は係助詞の用法が衰退し、間投助詞の用法よりも少なくなった。それでも〈ヘイケ〉は原拠の『平家物語』をかなり引き継ぎ、係助詞の用法を残している。

格助詞「で」の〈エソボ〉の使用率は同じ時期に成立した〈ヘイケ〉と比べてはるかに少ないが、〈高野本〉と近い数値になった。これは「にて」との関係では「にて」の音韻変化形の「で」の使用が室町時代末期に増加したこと、作品が場所・時・手段・方法などをよく記述するものであるかどうかということとに起因する。

〈エソボ〉の禁止表現は〈ヘイケ〉〈高野本〉と比較して高率である。〈エソボ〉の終助詞「な」の多くは行為を禁じる形で教訓を表すために用いられる。終助詞「な」

は教訓性の高い〈エソポ〉という作品の内容を反映する助詞である。

#### 〈注記〉

- 注1 形式名詞「あひだ」「うへ」は自立語と付属語（助詞）と二重に計量している。
- 注2 林（1971）は基本語彙をめぐって五つの概念を立て、その一つとして基幹語彙（ある語集団の基幹部として存在する語彙）という概念を提案した。真田（1977）は基本語彙および基礎語彙に関する概念を整理して基本語彙・基幹語彙・基礎語彙の三つの概念をまとめ、基幹語彙の定義を、ある特定語集団を対象としての語彙調査から直接に得られる、その語集団の骨格的部分集団とした。
- 注3 近藤（2002）では〈ヘイケ〉と〈高野本〉を対応させ、〈高野本〉に「こそ」が存するのに、〈ヘイケ〉で他の語句が対応したり、〈ヘイケ〉で対応する語句が存しなかったりする現象から、室町時代末期の話し言葉から係助詞「こそ」の使用が衰退したことを指摘している。
- 注4 『日本国語大辞典 第二版』（小学館）・『広辞苑 第五版』（岩波書店）などは「いつぞや」の見出し項目を立てて副詞とし、[学研古語]は「いつぞや」を連語としている。『古典対照語い表』（笠間書院、三版1992年）には項目がない。
- 注5 「な」の接続に二形が見られることに関して、大塚（1983）の補注23に「口語の下二段語にあっては（イ）（著者注、未然形＋ナの型を指す）のものが早くあらわれ、やがて（ロ）（著者注、連体形＋ナの型を指す）の混在、そして（ロ）の優勢へと変化したものと推定される。」「（イ）は（ロ）とくらべ、極端に使用がすくなかったのではない。」「エソポのも当時の実情を反映しているもの」という判断が示してある。

#### 〈文献〉

- 大塚光信（1983）『キリシタン版エソポのハプラス私注』 臨川書店発行
- 大塚光信・来田隆（1999）『エソポのハプラス本文と総索引』 清文堂出版発行
- 梶原正昭・山下宏明校注（上一1991、下一1993）新日本古典文学大系『平家物語』上下 岩波書店発行
- 金田一春彦監修（1999）『完訳用例古語辞典』初版 学習研究社発行
- 小松英雄ほか（1992）『例解古語辞典〔第三版〕』三省堂発行
- 近藤政美・武山隆昭・近藤三佐子（1996）『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（自立語篇） 勉誠社発行

- 近藤政美・武山隆昭・池村奈代美・濱千代いづみ・近藤三佐子（1998）『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（付属語篇） 勉誠社発行
- 近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ（1999）『天草版平家物語語彙用例総索引』 勉誠出版発行
- 近藤政美（2002）「天草版『平家物語』における助詞の基幹語彙について―『平家物語』〈高野本〉との比較を中心にして―」『岐阜聖徳学園大学紀要〈教育学部編〉』第41集
- 真田信治（1977）「基本語彙・基礎語彙」岩波講座『日本語』9（語彙と意味） 岩波書店発行
- 濱千代いづみ（2009）「天草版『エソポのハブラス』の助動詞の語彙―国字本『伊曾保物語』・天草版『平家物語』との比較を通して―」『岐阜聖徳学園大学国語国文学』第28号
- 濱千代いづみ（2011）「天草版『エソポのハブラス』・天草版『平家物語』の語彙の豊富さ，類似度，偏り」『岐阜聖徳学園大学紀要〈教育学部編〉』第50集
- 濱千代いづみ（2011）「天草版『エソポのハブラス』の語彙の特色―基幹語彙の視点で天草版『平家物語』・『平家物語』〈高野本〉と比較する―」『岐阜聖徳学園大学国語国文学』第30号
- 林四郎（1971）「語彙調査と基本語彙」『電子計算機による国語研究 III』国研報告39 秀英出版発行
- 松村明編（1971）『日本文法大辞典』 明治書院発行